

ペルーにおける非伝統的農産物輸出の拡大(現地報告)

著者	清水 達也
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	ラテンアメリカレポート
巻	16
号	2
ページ	61-66
発行年	1999-12-20
出版者	日本貿易振興会アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00006216

ペルーにおける 非伝統的農産物輸出の拡大

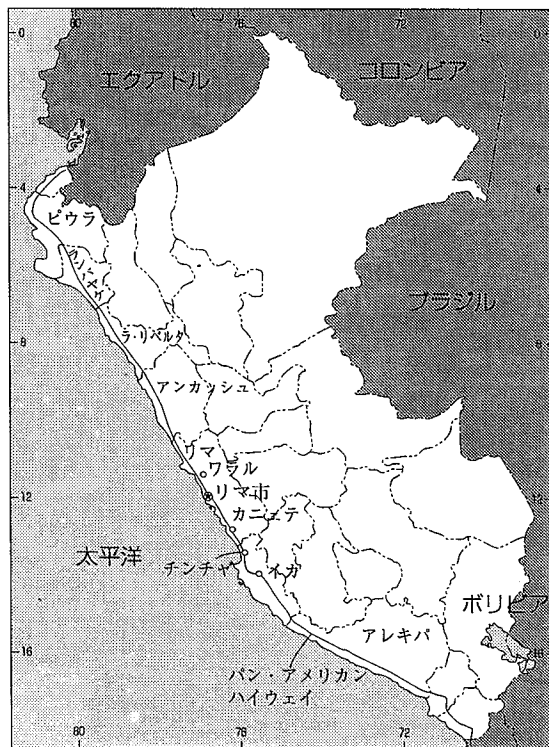
清水達也

8月末から3週間、非伝統的農産物の生産と輸出を中心に、農業分野について調査をするためにペルーを訪れ、首都リマの政府機関や大学、研究所、生産者団体などのほか、近郊の農業生産地を訪問した。今回はアスパラガスをはじめとする輸出用野菜、果物の生産と輸出について、現状を報告する。

イカ県のアスパラガス畑

午前8時にリマを発つバスに乗り、パン・アメリカン・ハイウェイを南下すると、道路の左側には砂漠のような乾いた大地が、右側には太平洋が広がっている。砂漠の中に少し緑が見えてくると、それが畑に変わり、木立が増え、街に入る。やがてほとんど干からびた川を渡り、今度は逆に少しずつ緑が少なくなり、再び砂漠に戻る。車窓に流れる風景を見ていると、このような風景が繰り返されるのに気がつく。ペルーの海岸部では、砂漠の中に流れる川を中心に人々が住んでいるのだ。午前10時頃にリマ県南部のカニエテを通過する。

冬の間、リマでは一日中どんより曇って肌寒いが、ここまで来ると空はすっきりと晴れ上がっている。



ペルーにおける

非伝統的農産物輸出の拡大

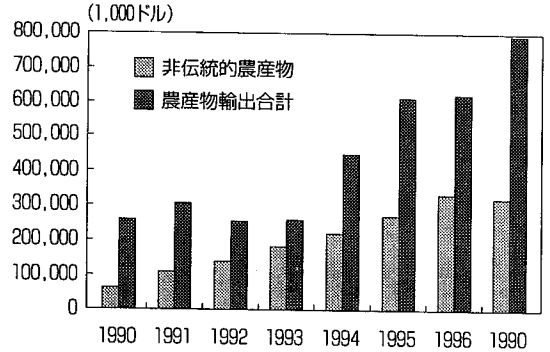
日差しが強いが、空気は心地よく乾いてひんやりと感じる。

窓から、アスパラガスの畑が見える。腰より少し高い背丈の草が生えているのがグリーン・アスパラガスの畑で、土色の畝だけが続いているのがホワイト・アスパラガスの畑だ。ホワイト・アスパラガスの場合、地上の部分を切って20センチほど盛り土をしておくと、地中で芽が育つ。それが地上に顔をだした時に収穫する。ペルーでは1980年代後半以降、アスパラガスの生産が急拡大しており、特にカニエテからチンチャ、そしてイカにかけてはペルー第一のアスパラガス生産地域となった。生産量も1980年代半ばまでは1万トン以下だったが、97年には14万5000トンにまで達し、そのうち4万4000トンを輸出。農産物輸出ではコーヒーに次いで第2位の輸出額を占めている。

非伝統的農産物輸出の増加

ペルーでは1990年代に入って、アスパラガス

第1図 ペルーの農産物輸出額



筆頭として非伝統的農産物の輸出が大幅に増加している。非伝統的農産物とは、輸出用農産物のうち、コーヒー、サトウキビ、綿花、アルパカ毛などの伝統的農産物以外のものを指す。アスパラガスのほか、代表的なものとしてはコチニール（染料）、マリーゴールド、ココア、ブラジルナッツ、乾燥マメ、タマネギ、マンゴ、オリーブ、トマトペーストなどがあげられる。農業省の統計によると、非伝統的農産物の輸出は、1990年の6544万6000ドルから、97年には3億1887万ドルと5倍近

ホワイト・アスパラガスの
収穫



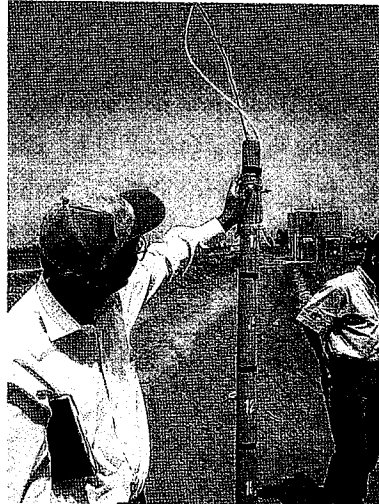
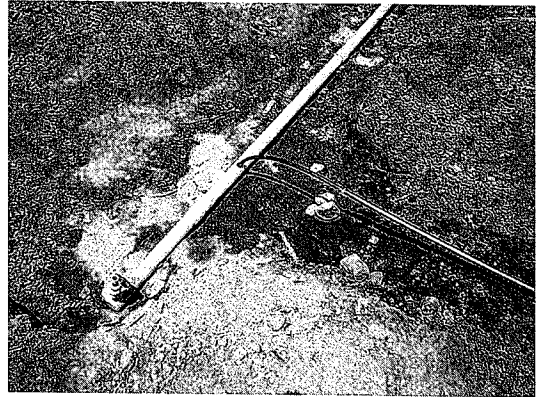
グリーン・アスパラガスの畑（イカ県チンチャ）

くに増加している（第1図）。

非伝統的農産物輸出，特に生鮮野菜や果物の輸出増加は多くのラテンアメリカ諸国で見られる現象である。これには，多様な地理的条件のほか，近年の輸送技術とインフラの発達や市場の変化が大きな役割を果たしている。ラテンアメリカ諸国が位置する低緯度地帯や南半球では，主な消費地である北半球の生産地の端境期や一年を通じての農業生産が可能である。熱帯でしか生産できない果物もある。また，これまでは輸送にかかる時間や費用のために，生鮮野菜・果物を遠く離れた市場で販売することは難しかったが，航空便や冷蔵輸送船の発達により，農産物を短期間のうちに新鮮なまま市場に届けることが可能になった。さらに，市場である先進国の消費者の所得向上や嗜好の変化により，多様な食品の需要が一年を通して高まったことが，非伝統的農産物輸出の増加につながっている。

90年代の新自由主義経済改革

非伝統的農産物輸出の増加の背景には1990年代の新自由主義経済改革がある。90年にフジモリ大統領が当選して以来，ペルーでは経済の自由化が進められている。農業分野でも同様に，91年の農業投資促進法は，それまで公営企業が独占していた主要食糧の流通，販売を自由化し，価格決定を市場に委ねた。これに続く改革により，個人や企業が所有する農地の所有権，使用权についての規制が撤廃された*1。また，92年に作られた土地登記特別プロジェクトは，農地改革などで国が収用した土地の権利を，個人や農民共同体(comunidades campesinas)，先住民共同体(comunidades nativas)などに移転することを目的としている。96年末で，22万8311件，1409万1930ヘクタールの土地が登記



タンクに水を汲み上げ、パイプから水を滴らせる。左は、水圧をチェックするために畑に設置された棒

され，所有権が明確にされた。個人や企業が土地の所有権を持つことで，それを担保に農業投資に必要な資金の融資を受けやすくなる。また，農地の売買によって，細分化された生産性の低い農地から大規模な生産性の高い農地への転換が可能になった。そのほかにも，関税や補助金の多くが廃止されたり，マクロ経済が安定して為替レートが安定したことなどにより，農産物の輸出入を妨げる要因が取り除かれ，非伝統的農産物の生産と輸出の拡大が促進されたのである。

*1 セシリヤ・レバノ・デ・ロッシ「国別経済協力指針策定のための基礎調査—ペルー—報告書」

アジア経済研究所 1997年 72ページ。

綿花からアスパラガスへ

非伝統的農産物の中で最も注目されているのがアスパラガスで、リマの南にあるイカ県と北部のラ・リベルタ県が主要な生産地である。これらの海岸部の気候や土壌はアスパラガス栽培に適している上に、他の産地に比べて日照量が多く、年に2回収穫することも可能で、土地生産性も高い。

今回筆者が訪れたイカ県のチンチャでは、もともと綿花の生産が盛んであったが、近年アスパラガスへの転作が増えているという。訪問した農業協同組合 CECOALCAI (Central de Cooperativas Agrarias “Laura Caller Iberico-Ltda”) でも、綿花栽培のための種、肥料、農薬などの販売、綿花加工を事業の中心としてきたが、最近では組合の所有地でアスパラガスの試験栽培をはじめ、収益の増加を目指している。現在、アスパラガスの育苗センターを立ち上げ、組合員に苗を供給する計画を進めている。理事長のクリソログ・ガルシア氏も、自らが所有する綿花畑のうち、6ヘクタールをアスパラガスに転作して試験的に生産を始めている。

事務局長ミゲル・バスケス氏によると、アスパラガスを栽培するにはいくつかの灌漑方式があるが、いずれにしてもかなりのまとまった初期投資が必要になるという。一番簡単なのは用水から畑に作った溝に水を一定時間流し入れるもので、この方法でもヘクタール当たり5000ドルの初期投資が必要になる。もっとも高度な灌漑方法は、地上数メートルに作ったタンクに用水の水を一旦ポンプで汲み上げてフィルターを通し、そこに肥料などを加える。さらに、その水を畑に設置したパイプに流し、少しずつ水をしみ出させる。この方法だとヘクタール当たり1万3000ドルかかる。前者の方

法ではヘクタール当たりの収量が2～3トンであるが、後者なら10トン近くまで収量を増やすことができるという*2。

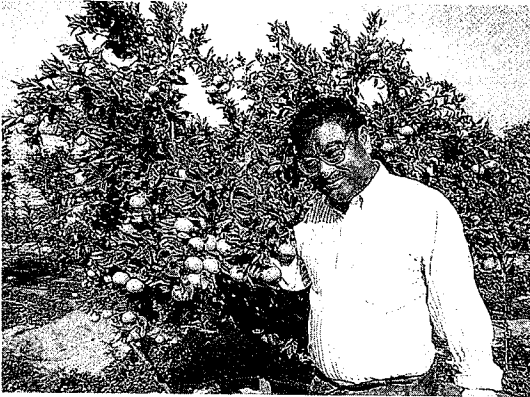
*2 農業協同組合CECOALCAI事務局長Miguel Vásquez Cárdenas氏とのインタビュー（1999年9月14日）。

アスパラガス協会の設立

アスパラガス栽培のブームを背景に、海岸部に畑を持つ栽培面積20ヘクタール以上の中・大規模生産者と加工業者が、ペルー・アスパラガス協会 (Instituto Peruano del Espárrago) という民間団体を1998年に設立した。栽培に関する情報収集と技術移転、マーケティング情報の提供を目的としている。数カ月に一度、アスパラガス生産に関する雑誌を発行するほか、年に数回、栽培技術、市況情報、マーケティング方法などについてのシンポジウムを開催する。このほか、各地で生産者を対象としたセミナーを開催し、肥料、有機栽培、収穫後の管理、加工処理時の衛生管理について、技術移転を行なっている。

同じく1998年に、アスパラガス協会と農業省農業情報室が「第1回アスパラガス生産者・加工業者センサス」を行なった。これは、アスパラガス栽培の実態をデータで明らかにして生産・輸出を奨励しようというもので、協会所属の生産者を中心とする約2100の生産者を対象として、生産面積、生産量、収量、灌漑方式、投資費用などを調査した。このセンサスの結果によれば、県別の生産量ではイカ県が最も多く、調査対象生産者の5割弱、ラ・リベルタ県が3割弱を占めている（第1表）。

生産者の種類別、生産規模別のプロフィール（第2表）では、個人の小規模（1～5ヘクタール）生産者が最も多くて全体の4割弱、次に個人の中小



ワラルでミカンを生産するケンマ社のセサル・フクダ氏

規模(5~10ヘクタール)が3割弱, 中規模(10~5ヘクタール)が2割弱を占めている。栽培面積では, 大規模(50ヘクタール以上)の株式会社が多とも多くて36.3%, これに個人中規模(10~50ヘクタール), 個人大規模(50ヘクタール以上)が続く。灌漑施設など大きな投資が必要なために, あまり小規模では採算がとれないが, 個人の場合には大規模生産のための資金を確保するのが難しく中規模にとどまる。また, 規模別で見ると, 大きいほどヘクタール当りの収量も多くなっており, 最新の施設を導入して生産性を高めているのがわかる(第2表)。これらのことから, 現在生産の主力となっているのは, 大きな初期投資をすることができ, 大規模化により生産性を向上させた会社組織の生産者であることが分かる。

ワラル地域のミカン農園

リマからパン・アメリカン・ハイウェイを1時間半ほど北上すると, ワラル地区に到着する。この土壌は肥沃で, 首都圏に供給する食糧の生産地となっている。また, 農業省のドノソ農業試験場があり, 生産技術の改良, 優良種子の生産, 遺伝子操作による品種改良などを手がけている。今

第1表 県別のアスパラガス生産量(1998年)

県名	生産量(トン)	シェア(%)
アンカッシュ	4,944.670	4.9
アレキパ	585.245	0.6
イカ	49,534.840	48.6
ラ・リベルタ	29,459.906	28.9
ランバイケ	1,152.000	1.1
リマ	15,553.483	15.3
ピウラ	666.375	0.7
合計	101,896.519	100.0

(注) 海岸部の7県のみを生産者を対象とした調査による。

(出所) 農業省農業情報室『第1回アスパラガス生産者・加工業者センサス』リマ ベルー農業省 1998年。

回の調査ではこの試験場で, 近郊の生産者から野菜や果物の生産, 輸出についてヒアリングを行ない, その後にいくつかの農場を訪問した。

セサル・フクダ氏の経営するケンマ社は102ヘクタールで年に3000トンの柑橘類を生産している。もともとネーブル・オレンジを生産していたが, 甘くて, 種がなく, 皮がむきやすい温州みかんの種を日本から導入して, 栽培を始めた。15年ほど前からカナダへ輸出をはじめ, 現在は生産量の約3割を輸出している。国内の市場価格がキロ当たり0.2~0.3米ドルであるのに対して輸出価格は0.5米ドルと, 輸送コストを考慮しても輸出したほうが利益が大きい。輸出の比率を5割まで引き上げることが目標であるが, そのためには味だけでなく見た目をよくする必要があり, 品質向上に取り組んでいる。果物に発生するミバエの問題のため, 現在は米国市場へ輸出できないが, 2000年には輸出できるようになる見込みだという。

ジャガイモからタマネギへ

チャンカヨ地区でタマネギを生産しているアントニオ・コバシカワ氏は, 以前はジャガイモやキ

ペルーにおける
非伝統的農産物輸出の拡大

第2表 アスパラガスの収量と生産者・栽培面積

規 模	平均収量 (kg/ha)	生産者数 (合計2,134人) (%)				栽培面積 (合計 17,552 ha) (%)			
		個 人	有限会社	株式会社	他	個 人	有限会社	株式会社	他
1.0ha以下	4,696	1.5	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0
1.0～ 4.9ha	6,036	38.2	0.2	0.1	0.0	7.3	0.0	0.0	0.0
5.0～ 9.9ha	6,356	28.6	0.1	0.0	0.1	11.2	0.1	0.0	0.1
10.0～49.9ha	7,356	19.7	0.2	1.5	0.2	21.0	0.7	3.8	0.1
50.0ha以上	7,773	3.8	0.7	4.7	0.2	16.0	3.2	36.3	0.2

(出所) 農業省農業情報室『第1回アスパラガス生産者・加工業者センサス』リマ ペルー農業省 1998年。

ユウリを生産していたが、国内市場の価格低迷のために4年前にタマネギに転作した。現在、所有地14ヘクタールのほか、3ヘクタールを借りて生産している。ペルーで一般に消費される紫色の皮のタマネギではなく、黄色いタマネギで、米国やコロンビア、エクアドルなどへ全量輸出される。米国ではオニオンリングの原料として需要があり、米国の産地が寒さのために生産できない10～3月に出荷できるのが強みだという。

転作に際しては、種子、肥料、農薬など米国の技術を導入した。これらの投入材はリマにある販売店から購入している。銀行からの融資が受けられなかったので、金融業者から現金を5万ドル、投入材など現物で4万ドル分借りた。順調にゆけば2年で返済できる計画だったが、1、2年目は作柄がよくなく、3年目でやっと利益を出すことができた。支払いを延期してもらっているが、このままゆけば数年で返済できる予定だという。

市場拡大への対応

以上のような非伝統的農産物の拡大を基礎として、生産者や政府によるインフラ整備、市場拡大のための積極的対応が行なわれている。生鮮野菜、果物の輸出で重要なのが、生産地から消費地までの流通経路において、鮮度を維持して輸送できる

インフラが整っていることである。主に輸出用の農産物が生産されるペルーの海岸部は整備のゆき届いたパン・アメリカン・ハイウェイで結ばれており、ワラルから1時間半、イカからも3～4時間でリマの国際空港まで運ぶことができる。空港の冷蔵設備は以前は十分に機能していなかったが、輸出業者が中心となって新たに設備を建設、運営することでこの問題は解決された。また、果物はミバエの問題で欧州や日本市場へ輸出することができないが、これに対して政府は、市場相手国との交渉や、新しい燻蒸殺虫設備の農業試験場への試験的導入などにより、少しずつ状況が改善している。

新自由主義経済改革の下で、ペルーの農業部門のうち輸出農産物の近代的生産部門においてはすでに成長が始まっている。特にアスパラガスや一部の野菜、果物の生産、輸出は1990年代に入って急速に拡大しており、今回の現地調査でもその一端をうかがうことができた。しかし、今後国内外での競争が高まる中で、生産、輸出の拡大を維持していくには、農業部門への投資の増加や、農産物加工により国内で付加価値を高めていくことが重要になる。

(しみず・たつや/地域研究第2部)